

# こころのやうき

## 加持の巻

### 目次

無礙光	一〜八
攝取門	八〜三三
加持	一三〜二七
付録	一〜二四

### 無礙光

密に、如來が衆生に對する度生の相に二面あり。

佛に二種の身ありて、一切衆生を終局の歸趣を示す。一に法性身、二父母所生身。

是法性身は十方虚空に滿て無量無邊色像（）の相好莊嚴あり、無量の光明無量の音聲あり、聽法の衆も亦虚空に滿ち常に種々の身種々の名號を出し種々の生處に種々の方便をもて衆生を度す。常に一切を度し須臾も怠時なし。是の如きは法性身の佛と云法性身佛とは神秘の神尊、自然の衆生は見す聞かず。

金剛界遍照如來は五智所成の四種法身が本有金剛（法界體性）自在大三昧耶（妙觀）自覺本初（平等）大菩提心普賢滿月鏡（大因）不壞金剛光明心殿中、自性眷屬金剛手等と與に三十七尊、

自性法身内眷屬身語心の金剛と五智光明（）杵微細の金剛と熾然の光明自在の威力あり。常に三世に於て不壞化身あり。有情を利樂し時として暫も息むことなし。常に

金剛の三密の業用をもて、三世に亘りて自他の有情をして妙法樂を受しむ。

金剛自性光明遍照清淨不壞種々業用と方便加持を以て有情を救度し金剛乘を演ふ。唯一の金剛能く煩惱を斷す。甚深秘密心地普賢自性常住法身をもて諸の菩薩を攝す。

唯此佛利は盡く金剛自性清淨をもて成ずる處密嚴華嚴より諸の大悲行願圓滿するを以て有情の福智資糧の成就する處なり五智の光照常に三世に住し暫くも息むことなく平等智身。

即五大所成の三密智印無數無量にして身及心智三種世間に遍滿して佛事を動作して刹那も休まず。

金剛乘とは神秘的宗教。神秘の神靈界に唯一の如來に四智三密の光明普く靈界の一切心靈に對して常恒に大利樂をなす。金剛自性光明は眞理即神の神聖態、清淨不壞の業用は正義に、方便加持救度有情は恩寵。

如來に神聖正義恩寵の三徳をもて衆生の大菩提心を増上し長養せしむ。

密には應化の佛陀は滅度を現すれども、法佛は常住にして滅することなく、四智四法身常に遍して三密加持の徳用をもて此に相應せる聖子を利樂したまふ。

此に相應するとは神秘的合一の義にして、神秘の窓を開きて窺ふ時は、法界を盡して如來の身心ならざるはなし。法佛如來は常に吾人の心眼の前に儼臨す。

現宇宙は天然の人が現在と見る如き唯常に物的存在にあらすして常恒活ける眞佛儼臨して吾人の信仰に對して指導者たりまた保護者となる。

### 菩提心論

諸の有情心質中に一分の淨性あり其體微妙。月の十六分の一より、初月より漸々に加はりて十五夜に至て圓滿となる。

開示して五相成身を得れば、本尊の身を成ず。即ち大我なり。

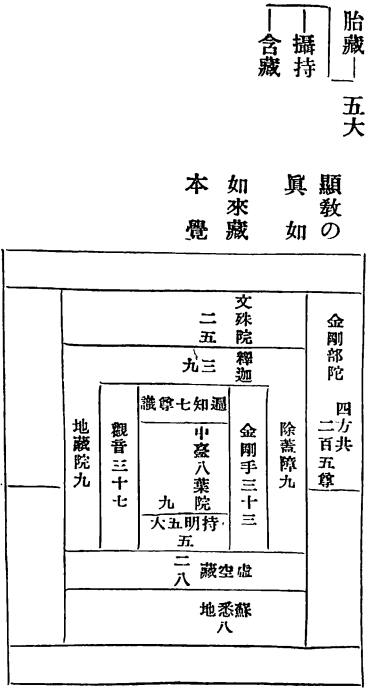
五相は其圓明は普賢の身心なり。十方諸佛と同じく三世修行證に前後あれども悟達に及び已れば、去來今凡夫の心は合蓮華の如く、佛心滿月の如し。此觀成じ已れば十

方國土若は淨若は穢六道の含識三乘行位、及三世の國土の成壞、衆生業差別、菩薩の因地行相、三世諸佛悉く中に於て現し、本尊の身を證し、普賢一切の行願を満足す  
 如來四智三密法身秘密の身語心の金剛法界に周遍し光明自在威力あるて三世に暫くも思ひことなく有情を利樂す。

金剛自性の光明(神聖)、清淨不壞業用(正義)、方便加持の救靈(恩寵)、この三徳をも神秘的に諸の心靈を攝し煩惱を斷じ有情を靈化し給ふ。

○

十三大院、中台八葉院は六大の總稱、阿字本不生顯の如來藏、次の遍知は識大七章分別



持明は五大又五大院、左右の金剛手と觀音院は智と悲を表し、其下の二重の虚空藏は前の悲智二能を重複して萬徳圓滿を、其上二段の釋迦院は悲智二徳が人間と實現し、其外の文殊は釋迦の智徳が一層外部に現はれたる也。除蓋障は金剛手院の智門より懷疑を除くべき作用、下方は悉地妙成就院と稱し一切諸徳の成就を示す。外金剛部院は外(護)の諸佛諸王を圖し六天の魔、地獄エンマの如きも皆大日の變化せる守護神なりとす救済の方便を以上の十二大院に四大( )あるも古來圖に加へざる( )

中央大日が本體四佛四菩薩は流出  
 四佛に因て大日の内容いかゝを説  
 明せんとす。四佛四菩薩とは因と果との別

金剛界九會……此精神現象を形容して其の作用の順序に配列せるなり。從因向果凡夫より佛陀に至る順序に配列せり。從果向因。佛位より濟度の方面に向て活動す。

金剛會 堅固 不壞 識 大、心智果 涅槃、佛陀、始覺

三	理趣	7	二	降三世羯摩	8	一	降三世三耶	9
四	一印會	6	九	羯摩會	1	八	三マヤ會	2
五	獨一法身	5	六	一六一	4	七	七三	3
四	印	十三	供養	七三	微細	七三		

1 カツマ。佛の事業成就を意味す、向上の終局向下の發起、自證の局と化他の發起  
 2 三マヤ 諸佛の本誓を外に表す

- 3 微細 諸佛か五智を具し衆生を感化する微細を表す
- 4 供養 羯尸と同意
- 5 四印會 已上の四會四曼を綜合し四曼不離の表
- 6 一印會 四曼四(一)同類無碍大日一佛に歸す
- 7 理趣 一印會の大日が利陀の爲に變化し菩薩の地に降り、金剛薩陲と爲りて活動す
- 8 降三世 利他の爲變化して威儀事業、降三世とは三世の業を降伏す
- 9 降三世三耶 前の意を具體的に表し 前六は自利後の三は利他自利々他の作用を形容せる心理

### 攝取門 終局目的

六大無碍常瑜伽(體)四種曼荼各不離(相)三密加持速疾顯(用)重々帝網名即身(無碍)  
(法佛の成佛)法然具足薩般若 (無數)心數心王過刹塵 (輪圓)各具五智無際智 (所出)圓鏡力故實覺智

一、六大。五大及識。大日經に我覺本不生、出過語言道、諸遇得解脫、遠離於因緣、知(空)等虚空。

大日の本體は法爾法然にして本不生の理體、因緣成にあらず。

大日經に、我即同心位、一切處自在、普遍於種々有情及非情。

六大日より四種法身と曼陀羅と及三種世間を生じ、三種世間の衆生世間と器世間と正覺世間とを生ず。上法身より下六道に至るまで麁細大小差別ありと雖とも六大の所生、六大を以て體性とす、顯教には四大は非情とす。密教には五大を如來の三摩耶身とす。四大等心大を離れず。心性異と雖とも其性は同、色即心、心即色即色無碍智即境々即智々即理理即智無碍自在能生と所生と云もの、都て能所を絶し、法爾の理何の造作かあらん。六大法界體性所成身無碍互相涉入相應し常住不變にして同じく實際

に任せりと。

四種曼荼各不離とは、大日經に一切如來に三種秘密身あり。謂字即形像。字者法曼荼羅、印とは種々標幟、即三昧曼荼羅、形とは相好具足身即大曼荼羅、此三種身各具威儀事業即羯尸曼荼羅。

一大曼荼羅。謂佛菩薩相好身、又其形像を綵畫又以五相成本尊瑜伽又名大智印

二三昧耶曼荼羅。即所持標幟刀劍輪寶金剛蓮華等又二手印等三昧耶智印と名づく

三法曼荼羅。本尊種子真言、又法身三摩地、及一切契經文義等、皆名法智印

四羯尸曼荼羅。諸佛菩薩種々威儀事業若鑄若(注)等是。

四種曼荼共數無量、一々量同虚空、彼不離此、此不離彼、猶如空光、無碍不逆故、曰四種不離。

### 三密加持速疾顯

身語意、三密、法佛三密、甚深微細妙秘等覺十地不能見聞、曰密一々尊等具刹塵三密、互相加入、彼此攝持、衆生の三密も亦便如是、故三密加持、若有真言行者觀察此義、手作印契、口誦真言、心住三摩地、三密相應加持故早得大悉地。

ビルシヤ那三字密言共一字無量、適以印密言印心成鏡智速獲菩提心金剛堅固體印額當知成平等性智速獲灌頂地福(一)莊嚴身密語印口時成妙觀察智即能轉法輪得佛智慧身誦密言印頂成所作智證佛變化身能伏難調者由此印密言加持自身成法界體性智ビルシヤ那虚空法界身。

又云入法身真如觀一緣一相平等猶如虚空若能專注無間修習觀(一)則入初地(一)一大阿僧祇劫福智資糧由衆多如來所加持、故至十地等覺妙覺具薩般若自陀平等與一切如來法身共同常以無緣大悲利樂無邊有情作大佛事。又云若依ビルシヤ佛自受用身所說內證自覺聖智法及大普賢金剛薩埵他受用身智則於現生(遇受)茶羅阿闍梨得入曼荼羅可具足羯尸以普賢三摩地引入金剛薩埵入其身中藉加持威德力故於須臾頓當證無量三昧耶無量陀羅尼門能變易專(一)俱生我執種子應時集得一大阿(一)所集福德智慧則爲生在佛家

其人從一切如來心生從佛口生從佛法生從法化生得佛法財。法財とは謂三密菩提心教法  
 ( ) 曼荼羅能須臾間淨信以歡喜心瞻視故則於阿頼耶識中種金剛界種子受灌頂職金  
 剛名號從此已後受得廣大甚深不思議法超越二乘十地此金剛薩埵五密瑜伽法門於四時行  
 住坐臥四威儀之中無間作意修習於見聞覺知境界人法二空執乃至(令)證金剛薩埵位。又  
 云三密金剛以為增上緣能證ニヒルシヤナニ身果位如是(經)等皆說此速疾力不思議神通  
 三昧法、若有人不闕法則晝夜精進現身獲得五神通漸次修練不捨此身進入佛位故曰三  
 密加持速疾顯。

加持者表如來大悲與衆生信心佛日之影現衆生心水曰加行者心水能感佛日名持、行者  
 若能觀念此理趣三密相應故現身速疾顯現證得本有三身。

重々帝網名即身  
 是譽譬喻明諸尊刹塵三密圓融無碍、身者我身佛身衆生身是名。(以下斷釋)

加 持

加持世界。ビルシヤ以本願故住於加持世界普現悲生曼荼羅凡十方諸佛身土皆大日如  
 來加持之所現。

塵道世界。十方虚空界中一々塵處皆有彼刹悉於其中現如帝網一々塵內復有利海是即  
 塵々現其不盡刹々亦復不窮如因陀羅重具足加持世界相。

ビルシヤ那普於十方一切世界一々皆現佛加持身是一一身各有十佛刹微塵數等菩薩金  
 剛大衆此諸大衆諸佛相好亦復無邊如胡麻(油)遍滿法界於中無空隙處又佛身のみに非ら  
 ず金剛菩薩等の身に心即差別不同皆、

此加持塵道世界中自有分淨穢而以加持(故)穢土即是淨土淨穢難分並是加持世界。  
 隨自意深秘義自受法樂秘藏。

如來秘寶の藏皆是法然所謂不可授人若施他時還就衆生心(室)中開出耳若得此意方便

修行則入嘉會見聞無盡莊嚴境界了々如正說時無異是其佛加持日相也一生可成。  
 大疏、此八葉及中胎五佛四菩薩豈異身乎、即一ビルシヤ那如來內證の徳を分別して  
 外に表示せんが爲の故に一法界の中に於て八葉分別の説を作すのみ。

如實知(自)心  
 秘密莊嚴住心即是究竟覺知自心源底如實證悟自身的數量所謂胎藏海會曼陀羅金剛界  
 會曼陀羅金剛(頂)十八會曼陀羅

智法身、佛住實相理爲自受用現三十七尊令一切入不二之道理。  
 法身佛住如々寂照法然常住不動現八葉爲自住受用樂三重曼荼羅令十界( )大空雖是

理智の殊廣略の異本來會無失萬法歸阿一字常同一の舍那。  
 理智雖異而同一法佛、理智滿法界心

遍一切身謂是無碍六大法界不二理身以爲一切本初( )本地身ヒル舍那曰我即是文殊  
 觀音等なり。我即是天即是人即是( )神( )

○作は無盡法界性海回融緣起無碍相即、相即相入如因陀羅重々無碍  
 如來妙嚴の相法爾無滅非造作所成故不以外寶爲飾乃至十住諸菩薩猶因承佛神力得見

加持身其於常寂之體如在羅殿加持修證。加持(は)内本地遍一切處常住不滅身。由此因  
 體依果成故 但因位滿者勝進即(沒)於果海究竟果分國土海及十中爲是證境界故不可說  
 佛自境界自體證義

○第一重 即自證境界第二重以降化他( )又自證の地を離れて又化他の門あるに非ず  
 五智色周遍五大無碍相五智色と云理五大智不相離 理起(智用)

○中胎藏ビル虚空法界身時處軌遍一切處身  
 大悲曼 ( )羅

因窮久遠之實修果窮久遠實證  
 金剛一法界自他平等無盡胎藏( )法界

加持成佛謂生佛平等互相加入彼此攝持唯獨自明了餘人所不見  
 聖( )經盡虚空遍法界一切諸佛十( )諸大菩薩證明覺覺身心期證無上菩提、內證

自受用外現他受用加持分齊重々無盡。

大日ビルシヤナ名爲法界王、於法得自在

如來是佛加持自以自在神力、加持身是曼陀羅中胎尊を佛加持と云是報身に當る

○

大疏一云、薄伽梵即毘盧遮那本地法身次云如來是佛加持身其所住處名佛受用身即以此身爲佛加持住處如來心王諸佛住而住其中既從遍一切處加持平等智即自力生即與無相法身本地法身即口性理無二無別而以自在神力令一切衆生見身密之色聞語密之聲悟意密之法隨其根性種々不同他受用加持身即口受用加持身即此住處名加持處

無相とは無碍周遍六大法界約理無相法身約智則言實相智身相は普門應現差別智印此即三種陀荼羅諸身也

七

華藏寂光二土只是不二心殿中胎金兩界異耳、故瑜祇經法身自證之境理智一如之地而云密嚴華藏也 即金剛界寂光土華藏即胎藏界(刹)

智法身佛住實相理法身佛住如々寂照離理智之殊廣略之異本來一法會無異實相理是華藏界胎藏壇如々寂照是寂光門金剛( )然此主不出行者菩提心中

○此世界とは即是淨心の土常無毀壞金剛の國土

○

觀音賢經の釋迦牟尼名ヒルシヤナ徧一切處其佛住處名常寂光如寂解脫乃至般若波羅密是色常住法故 常樂我淨四德莊嚴

依賢首 法身菩薩所居華藏與寂光同。探玄に此經中凡是所證皆悉く同是盧舍那佛世界同是華藏娑婆得此心時見釋迦淨土不毀見佛壽無量

四重法界曼陀羅。

加持身は曼陀羅中胎尊佛加持身當報身、自性自用は即兩部理智法身二而不二而二自證境界本地法身無相之相是名佛加持

身此加持は法界法爾智契於法相狀也。

無對光

自見等謂く淨菩提心法明道位に入て初地自見心王如來應正等覺則知爲心相位衆生所說法門種々名字皆是大日如來秘密莊嚴無量德號 一切心皆入金剛界中成內證功德差別

眞言行者初發心時直觀自心實相心實相者即是無相菩提亦名一切智也

無相菩提は約人則金剛薩埵一切智也 約人ヒルシヤ及普門諸身一乘普賢行位因分

果は圓融相即無礙

秘密世界。自性會場密機所見 加持世界顯機所聞顯聞は所擬外迹密見は能擬內證

成佛外迹。一切世間徒見我降魔成道方便度人之迹隨彼心相稱說(之)外迹は心起所變

大日無相法身を菩提( )と云も眞言門に望むれば初門也ヒルシヤ本地身華( )之體

超八葉絶方所非有心境界唯佛與佛乃能知之。

華嚴。究竟果分國土海及十佛自體融義等乃至因陀羅網及微細等を論せず。因陀羅の義唯因分に在つて、佛身論。佛三身通別二種

佛身論。佛三身通別二種

大日釋迦を併て三身を成すを通と云。釋迦大日を分ちて三と爲を別と云。

獨一法身此與獨一法界義同。

大疏一云、獨一法界加持之相と今密宗則以同一無盡法身爲其極致。

獨一法者即平等法界本地 種々形者是普門諸身の外迹緣起法爾の深旨を明す。

密家には普賢因分を顯と爲、果分を密と爲。

佛三無盡莊嚴藏を盡して同く如是等種々因緣無數方便の普門をもて應現して群生を教化す。悉く秘密加持に非るなし。能く如來の清淨知見を開示す。

○

金剛界教主一切( )成就大日の覺位に登るを金剛界如來と名づく。瑜祇に、大日を説て金剛界如來と號す 五種法身即ち一の他受用身。

大疏に、平等法界究竟寂滅無有出入之相以如來神力加持故出無盡色身 其實從緣而起無生性是實相即同法界之體 金剛薩埵加持是則理智不二一體大普賢

○本有淨菩提心初法明道を寂光と曰ふ。即ち此心より寂照の光を生ずと

究竟( )智斷黑色滅するは斷德白色は智德、本覺如來の如( )時は薩埵無明黑色滅し十五日に至る十六生正覺を成とは是なり。

究竟、華嚴。究竟果分國土海及十佛自體融義等。

加持示現莊嚴藏を盡して無盡無邊際なる所以は如來遍一切處常住不滅の身に異なるを以て (内證自受用外現亦他受用)

諸佛卒塔波法界宮殿全身を成爲金剛界如來毘盧遮那遍照の身を現證すと(聖位經盡虛空

遍法界一切諸佛十地滿足諸大菩薩證明覺覺身心頓證無上菩提)

法界は廣大金剛智體即如來實相智身以加持故即是眞實功德所莊嚴處妙住の境心王所

都故云( )究

無盡莊嚴三昧とは自在神力加持三昧に住して三無盡莊嚴藏を奮迅し示現し給へり

平等莊嚴藏三昧凡因果理事等の法全體無碍六大法界也

加持とは法界體性起大圓明而此圓明與法界冥するを曰加持本地無相即自利、加持は利他(諸佛加持生佛平等互相加入彼此攝持唯獨自明了餘人所不見)

一切有情皆如來藏普賢菩薩自體徧故謂く遍一切處六大法身大我一切本初、性相等謂六大四曼諸法全見不思議法界法爾緣起無一定相而其法住常住而已。

報身如來と云は是佛加持身乃至自在神力を以て 加持三昧

加持身とは是曼陀羅中胎尊此(名)佛加持身、當報身

加持。自性自用即是兩部理智法身不二而二而不二自以界本地法身無相理身是名無相 法身無碍周遍

五人之相智身相智周徧 爲體之相無碍五智爲體是謂佛加持身非隨他 加持身此加持法界法爾智慧於法(之相狀)然也然乃加持只是不二異名但究其功在智

金剛頂部に法界體性起大圓明而此圓明與法界冥するを云加持

自性會中自在本地理佛加持智佛二門無相自證現相加持利他

最尊。即身義。我者大日尊自稱此土大日は教主本地法身而究其體則是無碍周遍六大法界、我者常住不生之體即是一切所依止也、一切本初、一切とは無數を擧ぐ初とは本來法爾證得如是大自在一切法之本初。

第一法界身不生不滅 本來寂然此法第一微妙(實)無過上堅徹三際此三際三密三身

ビルシヤ者如日出于世能く暗冥を除く能く一切衆生所有の事業を成就し大地所生の類に益を被らざる無か如く此實相自然の大慧の日も亦復如是無相無作にして而も無盡莊嚴を具足し普門不思議の業を成就す。

○

相大。聖( )經ビルシヤ佛於内心證得自受用四智大曰内證本地五解脫 外令十地滿足菩薩をして他受用故從四智中流出四佛各位(本方)坐(本座)外用加持之解脫輪

如來内證は實相外用は加持

實相尅其體則是遍滿法界六大無碍圓融而有自性清淨光明故云實相

佛住處。一往論、色界(頂)を以て本地身住處を表し須彌頂を加持身住處を表す。二

往言ば併加持機邊併是本地佛邊而尅其實無盡同一法界宮殿。

即染歸淨故說法爾(即爲實如菩提樹下說華嚴即爲蓮華藏十佛境界

密本有金剛界自在大三昧耶自覺本初大菩提心普賢滿月不壞金剛光明心殿、また衆寶日宮光明心殿、胎金二而不二の深義を明。

眞言大我謂理智法身即心王ビルシヤ那

大日經に、内心之大我。疏に大我者佛の異名(別名)心王所住處必有塵沙心數以爲眷屬

○

階級 契實謂入初法明道(逮)見加持境界

契實は本地境界法明道滿位加持本地交際、法明道は淨菩提心を爲門 若入此門初入一切如來境界(法明とは心本不生際を覺するを以て其心(淨)住して大慧光明を生じて普

く無量法性を照し諸佛所行の道を見る故に云法明道滿位に契實也

金剛頂( )には薩婆若智は本地極 金剛喻定其行位 十地は加持行位

ヒルシヤ( )第十一地を以て本地(極)と爲 初地以上其行位

三劫加持行位

○

加持 加持事迹の盡きて緣謝すれ則滅し機興則生即事而真無有終盡(如來所證能加衆生所用所加持)

此蓮華是實相自然智慧 蓮華葉是大悲方便 正以此藏爲大悲曼陀羅體 其餘三重是此

自證功德より流出せる諸善智識を入法界法門 加持

如來昔行菩薩道時普門より親近如是等佛刹微塵數

諸善知識加持行道於一一功德藏皆到極無等比無過上味本地境界以如是內證之德無量無邊故

本地其所加持現作法門眷屬亦復無邊加持出現

內心觀之客體の故に加持、一體の故本地 行者自心中の具佛會土海十方通同爲一佛土唯自明了

他所不覺故云秘密曼陀羅

妙樂十方法界唯一佛此( )同身土

法界宮是明法佛法爾身土謂法界宮既從遍一切處加持力生即與無相法身無二無別 大樓

閣是明隨緣顯現身土 即大樓閣は如來(信)解願力所生即於一切(實報)所生最爲第一

以三十七內證無上金剛界分智威力加身頓證ヒルシヤ身

ヒルシヤナ如來滿身界身如々之體此身理智不二の體

彼國土海十佛三佛自體圓融妙極之境乃是乃五大五智法界曼陀羅

理智滿法界心 五智圓滿即ヒルシヤナ真如法界智不生本體只是六大法界體性無碍周

遍無始無終堅徹三際橫互十方包三世間函十方界故云我六大法身大我 一切本初號名世所依

又此六大互爲能所法爾(緣起無盡無邊故能生隨類形諸法心法之法相色法等四種法身三種世界

迷之號衆生悟之爲大覺、大覺世尊爲彼衆生說種々道内外大小權實教義皆無出此本初不

生六大法界而名曰如亦曰法性

用。大悲胎藏曼陀羅

一多同一金剛一法界 無盡胎藏多法界又同は胎藏理體無盡は金剛智用

觀行。介爾心即月輪如し即蓮華の如し在纏出纏を論せず只胎金理五土智五智二心以爲

蓮月此妄心蓮心月六大法界所成全一切諸法故云六大、此觀成十方國土若淨若穢六道含

誠三乘行位及三世國土成壞衆生業差別菩薩因地行(相)三世諸佛悉於中現證本尊身滿足

普賢一切行願此菩提心能包藏一切諸佛功德。

介爾一會蓮月六大所成而全法界則此心蓮月從本際已來常是法界體性自然圓明境則是

觀智即是理 故云心月證心心自覺心由

大我小我融和。

(肉團)心蓮に従うて尋求淨菩提心

心は月輪の(輕)霧中に在か如し 此は大末那慮知に従て金剛月輪五智解脫曼荼修發

せしむ 本性(清)淨心とは本地常心是不思議境也增長智如來常智不思議觀也

生佛二界一味妄即真心蓮月理を達し、胎藏智心を月と爲、金剛月輪自心の當體之を

離れて一法も有ることなし。

事密實義不壞教相而入法界 此由三(部)法爾加持大疏、種々世諦門皆是法界

標幟。又云如來一一法門與法界相稱乃至無有毫釐增減

附  
録

六

秋風にすゞしくすたくむしの音もいとあはれに今年の秋もはや半ばすでにくらし實に惟みれば光陰の過ゆくことはやくたゞ時光のみ空しくくらし道業の運ぶことはいつもすゞみやらで日々御わびのなかに日を明し候。

さて日外の是心作佛の案に對し御修養の結果を御しるしに相成候披見候。日々に身の行爲と口の言語と意の思想とに於てみひかりを業の上に現はすことゝのこと、修養日につき心行いよく進むときはたとへば新月一日より三日まで日々に光を増す如く、敢て問ふ君よあなたが始めて如來の眞理を聞なされし時は如來の光明は是いかなるものなりしかを未だ曾て經驗せざりしなれば定めて此眞理のことにつきては晦日の夜の如くにて我精神中に月いづれにありやまた無や、有や無やのなかにこれをぞと目ざす處だになかりしことに候はん。其頃ほひと今日とを比較する時はいかに今宵は已

に月は何日頃ほどに相成候ように感じられ候や。  
さて念佛心と煩惱心とは其比較いか成ものゝように觀じられ候哉此兩念を諳かに觀察してますゝ關黒をさりて白光に進まれんことを御すゝめ候。

きよき同胞たる君よ、

涼しき風は秋の氣をもよほし海潮の聲は梵音いと朗らかなる今宵心を静めて我は西の空はるかなるそなたに思をめぐらして觀すれば我理想中に浮べるいける觀世音ぼさつは百福の莊嚴はおごそかにかゞやくごとくにして其ぼさつの心の中には眞如の月さやかにして彌陀の光明永なへに照しつゝあるように想はれて候。其光に充されつゝある胸のうちには五塵六欲のけがれもなく煩惱のほのかげだにもなきように觀じられ候得ども、現實なる君にはいかゞ在らせ給ふ哉全くこなたの理想に浮ばるゝようにおはせしや。皆人の理想に觀じらるゝごとくには現實の血のめぐりつゝある間は行べき筈はなかるべしとは存じ候へ共、それでも我理想にしのばるゝいけるぼさつは血や肉までも如來のじひにみたさるゝようにおはれて候。さて女ぼさつよ、ぼさつは血と肉を以て其中に如來の心光照わたるなり。

煩惱心と如來心と併存するなり煩惱心如來心より。深きは下地のぼさつなり。如來心煩惱心よりつききは上地の丈夫なり。日々にこの兩方の心を比べ觀じて、ますゝ如來光明心が其觀念中に多ならんことを希ふ。尙其心光を身の行爲に現はれん事を望む。

七

量りなき光りはかつて照らせしもしらで久しく年を經にけり

さて眞理の源なる法身無量光の本覺眞如の光明は無始より已來本然として永しへに普く十方法界を照らして到らぬ際もなかりしを我ら衆生本覺の日輪の中に在りながら無明に戸ざゝれむば玉のくらき開夜に生死の夢をむさぼりて五塵六欲貪瞋煩惱を以て全く我と謂たりき。迷の我をもつて實の我と謂ひ本來我性を知らず我心は只煩惱のや



どり、また三寸の胸中是全く我と執し、有や無やのなかに葬られ、本覺の我本來の自性は未だ曾て夢にだも見しことなかりき。

本覺のミオヤ無量光の分身たる我なれば、我心靈の光本より法界に照しわたるとは幻にだも見たることなかりき。無量光の此一分たる我心靈にしあれば我心靈を開發し來りて觀する時は我心宇宙に周遍しぬれども、我心靈の本源たる大ミオヤを知らざるほどは一切衆生悉く心靈同一の本源にして皆同胞の眞理を覺らざるからは、いかにして同胞と名乗ることを得べきぞ。

聖き同胞なる君よ、あなたがたが御召なされし衣の中寶珠を開き見しに燦然と光り輝くを發見したる時のうれしさよ。はじめて同胞と名乗ることを得たる我よろこばしさよ。本來の心をさとり來りて初めて本覺の父に拜顔せしことの目出たさよ。

あなたの心の光りは普ねくいづこにも照らさぬ處もなきなれば照しわたるあなたの心はたとひ千重の雲百重の山をへだつとも何かは礙ざるものがある。

八

佛心とは一切平等にして彼我の差別なき心。

煩惱心とは四大假和合の身を我身なりとおもひ受想行識を我本心なりと思ひ苦樂を共にする心申す。

曾て煩惱心と佛心との區別に付御答辨の御書披見候。理論としては御意見の通りに宜敷候。已に光明を得たる上は佛心が自己の本領にて、煩惱心は本領を忘れたるよりに起る廢物なれば此廢の爲に横領せられぬやうに、常に光明名號を念じ、念々光明現前する時は佛心が常となり光明の生活を得べし。

清淨なる光明の念は自己の本心、歡喜なる光明の心は自己の本領、智慧光明の念は我本心、不斷光明の念は我本性、此光明の念をはなれて念々煩惱と相應するは未だ如來の大信得ざればなり。如來の大信は我心即ち如來心、如來心即我大信。

如來心をはなれて我心なきは是大信心なり。古人が、となふれば佛も我もなかりけりなむあみだ佛の聲ばかりして

本來の我名とすればうれしけれなむあみだ佛の聲きくときは

九

またも世にいはいふ言葉はなかるらむ無量光壽の御名の外には

如來無量壽の中に安住する身には去るも來るもなく常住安穩の安心には候へどもしばらく此四大の身はかりのやどり月日めぐりめぐりて明ぬる年をば四十四年とはなりにけらし。同じく如來の光明のなかにさらに改まりしこのよろこばしさめでたく御祝申上候。今年は亥とし、猪てふものは只すゝむことをしりて退くことを知らずと聞ならく。されば我佛道に志すものゝ爲にはよき年にて候。即ち梵語アピパツチこちらに不退轉といふ。不退轉に位不退と行不退と念不退と處不退との四位あり。位不退とは位とは即ち一度自性の眞理を信認したる上には退轉せぬことなり。即ち如來の光明をたしかに信認したる上は、たとへば一旦鍊出したる金は泥の中に埋没すとも金の性は變せざる如く、一度如來の光明を得たる精神はたとひ煩惱泥中にありながら

も其精神に赫耀たる處の心光はくりますこと能はず、いか成事情の爲にも精神に照しわたる如來の光明は決して退くべきものにあらずこれを位不退と云ふ。行不退とは如來の光明を行の上には現はすことなり是は先の位不退にくらぶれば一段すゝみたる位にしてよほど修行の功を積まざればかたきことである。いかにとなれば人或時は其行の上にて全く如來の光明を現すことが出來うるけれども或場合には退くことがある。先の位不退は精神に認めたる光明は決してまた信を失ふようなことがなけれども、光明を實行に現はすといふことは立派に行に現はすことあればまたそうゆかぬこともあるなれども、如來を力にしてすゝむ時は何分かづゝをすゝみて身と口と意の行爲に光明を現はすことに成り申すべく候。

且つ稱名の行位が退轉せざれば自から行不退とは成りぬべし。猪武者のよこひら見すに一心に向に如來の光明によりてすゝむ時は必ず如來の大法身によりて光明によりてすゝめ玉はんことなりと信じて、而して今年ば猪のように光明の中に専心にすゝむことにせまほしく候。

一〇

いければ念佛の功つもあり死なば淨土にまゐりなん免てもかくても此身にはおもひわづらふことぞなき、との御言の意は

たゞ大ミオヤの御慈悲にうちまかせてたとへ病のために身はせめらるゝとも心だに大ミオヤの慈悲の懐のなかに安任せられなば餘の事は兎にも角にもにて候。

實に頼みがたきは有爲の世期しがたきは四大假和合の身、又五六日前には法會に來りて盛んに説教したりし僧が昨日は腦溢血にて忽に黄泉の旅路に立ような事、健康とても頼みならずまことにおくれ先だつ世の習、しかしながらあなたが先なるかまたいま健康といふ私が先なるか決して自分の計らひにゆくものならず、たゞ大ミオヤに一任し奉るのみ。

此土二日一夜の辛抱は淨土に於て百歳するよりも勝れたり。百歳の功よりも勝たる一日一夜なれば苦しなからも如來を離れぬように稱名し候ごとを御すゝめ申候。

ならくがに久しくうけむ苦しみをすくひかへてぞけふのいたつき  
無始よりも積もりし罪にくらぶればいかに輕きぞけふの病は  
かぎりなくならくに落るつみとがをはたさん爲やけふのくるしみ

一一

念佛救世大慈父として如來は我々衆生の爲に大悲のおやさまである。若しもミオヤの慈悲を以て子を愛念するの思召なかりせば、子はいかにして常没流轉の中を出ること

ができませう。人類にしても親の慈悲でふものなかりせばいかにして子どもは成人できませう。親の子を愛する深きより子の啼をもまたいかなることといはず兩便の不淨をも敢て苦にせずして育てるは是只慈悲心あればである。そのことは實に自分勝手のおさましき此凡夫をまた心のけがらはしき我々を却てあはれみ殊に愛して、あさましき子どもが親のもとをにげ出して自から三惡道に入るべきをも飽までたすけんとの親心である。世間にては親は子をおもへども子はさまでに親をおもはず。

念佛とはかくまで慈悲ふかきおやさまを心に記憶して忘れまじきとのこゝろなり。念法とは法とは軌持の義として自然のきまりを云ふ。たとへば火は物を燒水はうるほすなど是きまりなり。

佛を衆生が念すれば其念の中に佛が感じ來るは法である。天の月が水に感應するごとく佛を念すれば佛が我心に感應する。また梅をおもへば舌が自然に濕も自然の法である。佛を念すれば恩寵のありがたく感する自然の理なり。すべて理のとほりを法といふ。

たとへ佛が在しても衆生の信仰に應ずる自然の理法がなかつたならば衆生が佛に成ることは出來ず。自然の法があればこそ念佛三昧の法が最も法中の王である。その法をおもふて忘るゝなといふことを念法と申候。

念佛とは僧は和合とて佛と法とを以て我心として居る人のことにて生たまゝの心は普通の人間である前の心をすてゝ佛といふ親の子となりし心に生れ更り法を以て我心とする人である。

たとひ佛と法はありても其佛と法とを維持して人に傳へる人がなくては此すくひにあづかることが出來ぬ故に我に法をさづけて我に道の心を發さして呉し恩人であるから常に忘れぬといふが即ち念佛と申候。

佛は十方三世諸佛數多ましますも大本は只一人のあみだ如來、分身が十方諸佛に

てまします故に、一人のあみだ如来を念じ奉らば十方の一切諸佛も同時に念ずると同じ利益なり。

法に世法佛法として佛法とは衆生を佛にする法である無量の法門はあれどもつまり我を佛にして呉るを要とすれば大悲のおやさまから私どもを助け下さる念佛の法がひとり大事である。此念佛三昧ひとつにて我が佛に成ることが出来る故我々には念佛三昧の法を最も一に大切と申候。しからば一切の萬法は自然に其法の中にをさまりて居るなり。

僧も數々あれども全く我に救の道を手引して呉た人、それに依て自分の安心出来し上には又更に安心を他に求める必要なければなり、それでもまた安心できぬといふ間は實はまだ安心できぬなり。

故に我に安心證得を導びきし僧を常にわするゝなどの義である。是を念佛念法念僧とは申なり。

一一一

只今淨土宗全書十九卷増上寺觀智國師の語に又淨土宗は八萬說聖教皆是阿彌陀と見奉る。他力實體の法門に至つては色心實相にして森羅萬象山河大地彌陀にあらずと云ふことなし。

天地萬物皆法身彌陀の現象として見れば野に山に紅に黄に染まる梢も何かは彌陀の御ちからに感化せざるやある。されば宗祖の阿彌陀佛に染むる心の色に出でば秋の梢のたぐひならまじとの道詠におもひ合すれば野山の紅葉は法身の恵みに染まり宗祖の御道心は報身の慈悲に薰染して實にも紅に麗はしさを呈して美しさを現はせる御すがた眼にも見へばいかに麗はしからん。野山の木の葉のその如くに何人も一心に念佛して如来の慈光を被むるあらばより清らけく麗はしくうれしくも楽しくも法悦と三昧樂との妙味は感ぜざらめやは。おもへばありがたや。

御玉章に接し御地の模様を承はりうれしく存じ候。山崎垣田由布家のいと清き優婆夷の四たりの君の御發起にてきよき集ひの御仲間が成立したとの事をうけたまはり上なき悦ばしさにて是ぞ大悲のおや様の御はからひと存じ深く感謝し奉り大悲のミオヤは永瀬上人の身を通じて斯くは御はからせ給ふものと存じ有りがたく感じられ候。就いては會名をとの仰せ。

我々は一度大みおやの御許を離れ久敷六塵のちまたにさまよひ生々世々あらゆる塵と埃に汚され實に己ながらもかへりみれば恥敷心のすがたとはなりぬ。それを憐れみ給ふみおやの恩寵。無始已來の染汚をそぎてきよき聖意の子らとして靈育し給ふ思召を經に其れ衆生ありて此光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜんとの聖意より心光常に我らを攝化し給ふ。我らは日々に婆娑の塵埃中に在るほどは誠に如来の心光に清められざればならぬ身、日々塵埃にまみれるが故に清めを仰がねばならぬ友なればそれを常に忘れぬ爲に清き友と云ふ名を以て結ばれ給はんことを願候。

如来は靈光を以て清め給ふみおや、我らは聖名を稱へて清めらるゝものゝ共會まりが即ち友にて候。

此友のなかにはとうのむかしから入會なされて在せし觀音勢至の兩ぼさつの御名を忘れぬ様にねがはしく候。

そは觀音勢至兩ぼさつの名を稱へて念せよとの云ではなく若念佛する人は人中の白蓮華兩ぼさつも常に勝友と成りて愛護し給ふとの意味にて候。

されば友の衆は生れた計りのまだ赤子の觀音さまなので觀音の頭に常に阿彌陀如来がまし〜て離ることなき如くに我が愛敬する處の友の衆の御こゝろにいつも〜大みおやの如来のはなれぬ様に一にきよき名を稱へて念じ給はん事をねがはしく候。

歡喜光裡に新年を迎へ無量壽の靈名を稱へて壽ぶき奉つり候。寒風肌にさむき夜もあたらかなる大ミオヤの慈悲のふところにすむころよき。

一三

其のちは如何に在らせられ居候哉。今日はよき御天氣とおもへばまた翌日は風が吹き出で、風が靜かに成らんとすればまた曇となり雨となるほんとううるさき世と云はよいもの、其中に娑婆の變化きはまりなき趣のあるのである。此世の中に生存するほどはこの心配が漸くかたづいたと思へばまたつぎに一の心をつかはざればならぬ事わき出で来る。ほんとうにいつに成つたならば何のころが、よりも無き真にのどかなる心の春に成るであらうと大かたのひとは思ふのであろうけれども、それは風も雨も曇も曇り寒さも曇り一年中をのぞむやうなもので無理な要求である。風も雨もあつさむさもみな常の天地の働としてせんければならぬので只人間の都合や勝手のため天地は働きたる居るではない。故に自分の方から天地の氣にかなふやうにして行かなくてはならぬと存じ候。此の世間を娑婆と云ふのは娑婆とは梵語にて譯すれば勤忍土、勤忍土とは此世界自然にも又人間同士のなかにも相互にいか成ることに堪へこらへどう云ふ事にも忍ばねばならぬ世界と云ふのである。いかなる憂き艱難にあうてもそれを勇ましく大丈夫に戦ひて打ち勝つ力を以て忍ぶのが強忍とよぶのでどのやうな事に對しても甘き物をたべるやうに安んじて忍ぶのを安忍といふのである。けれどもそれは並みの人には叶はぬことで實に絶對的に偉らい。慈悲と御力によりて非常な力を加へていたゞき、たすけてもろうて光明の日ぐらしを得らるゝのが即ち念佛者の生活である。

願くは大慈悲光明中に安き御日ぐらしあらん事を望候。

一四

願くは大慈悲光明中に安き御日ぐらしあらん事を望候。

承はれば長時間に渡りて全力を注ぎ爲されて折角に積累したる要塞を一朝の砲撃に破壊せられしは如何にも遺憾千萬實に同情に耐えず候。併ながら失敗は成功の基。其経験に鑑み益鞏固なる降魔の策を施し爲されん事を希上候。

御書中に身體の健否は精神に及ばし精神は身體を支配すと云ふ事に疑を生ずと云々實に御尤に存じ候。

本より佛敎に色即是心、心即是色とて色とは物質即ち身體の事にて身體と精神とは不二不異の關係を以て居り身體の故障は忽ち精神に及ぼし身體がそのまゝ精神とまども見做す事も有之候。然して精神の働きたる程精神が身體に屬する關係深く候。例へば人類以下の動物及び人類の幼年者の如きは身體の外に精神の働きたることを無き位にて候。而して頭腦の奥の底より高等なる理性が顯動するようになりて、精神が身體を支配するように相成候。尙進んで靈樞性が正しく顯動するに随つて彌心靈の勢力が強くなりて身體を支配する様に相成り候。普通凡夫は精神が身體に支配せられ進み。進んで聖人と成る時は精神の力と格が非常に高等に相成る故に精神の靈力益々遠大になる故に身體のために精神が左右せられざること相成り候。

兼ねて申演じ候通り精神に天性(生理的、理性靈性)と三階に分つ時は天性的の精神は全くすべての動物の共通性にて身體が其まゝ精神かと思はる、位なものにて候。

若し進みて靈性の充分發達したる聖人の如きは身體の爲めに精神を左右せらるゝことなきが如し。

ソクラテースが從容として毒を呑み釋迦牟尼が六年苦行身體疲勞すれども精神は全く健全なる如く宗教の旨とする處靈性的精神に宇宙大なる大靈の力を被むりて心靈の力能く自己の肉體を慰安し肉體を能く扶くるに至るも天性我は肉體の支障のために影響を被むること免れざる處なり。

願くは大靈の力を我靈の力として宇宙と共に洪大なる心靈を發揮して自己の身體を加護せんことをこそ願はしく候。

一五

大ミオヤの慈しみを傳へん爲にこゝかしこめぐりしに大に延引に相成候事慚愧に耐へず候。稍春暖候に相成候。昨今云何被爲居候。哉御書翰によれば御病氣にも拘らず聖き道に益々御すゝみなされ候由隨喜に不堪候。

五井の君よ。可憎病魔のために襲はれしは何とも同情に勝へず候へども、それでも貴重なる光陰を悶の中に埋めてしまふようなことはせずに永遠に靈活すべき聖き道を求め肉をかへりみず靈に活すべき眞理を捕獲することあれば禍も變じて福となることにて候。世の人のおもふ幸福必ずしも眞の幸福ともならず候。とかく健康にして百年のいのちを保つともたゞ徒らに肉の爲めにほだされて空しく過し候へば何の所詮かあるべきぞ。

如來は絶對無限の光明なれど、其光明を我が物として、如來には本より親子にて候へば親のものは子のもの親の無限の光明が即ち我心の光と相成候。しかれば如來と共に我が心も宇宙に周廻してのこりなく候。

風雨にあらざる限りは人間の建てた狭い家屋より出で、而して大ミオヤのかぎりなき蒼天の青硝子の屋根の大きな住み家の中にて大ミオヤより使はされし太陽の能力より出づるオゾンとそれから新らしきよき酸素の豊富なる空気をほしきまゝに吸うて而して人間界の方を見ずして大ミオヤのまします天つみそらにこゝろを逍遙してこゝろは聖きみ國の人と成り候へばかへつてよろしき事と存じ候。實は愚納事明治三十三年頃肋膜炎と肺炎とに患部を構ひ少は咳血もいたし候。こゝろを大ミオヤにまかせこゝろを本にして養生いたし候漸々恢復いたし今日の状態に相成候。随分夜を日につぎて二人前ほどの仕事をいたしつゝつとめ居候。是また自分の力ではなく大ミオヤの御恵に願くは大ミオヤの慈光のなかに平和なる心の御ひぐらしのほどを祈上候。

一六

承れば此頃の御からだの御容子春ごろにくらぶれば何ほどかは御快よきに向ふとの事大慶此事に候。いけらば念佛の功つもあり死なば淨土にまわりなむとても角ても此身にはおもひわづらふことぞなきとの宗祖の御語のよう。此世に在ても光明中の住居ならば放ていなむべくもあらじ、さればとてかぎりある世を強て留らむとおもふにもあらぬ身には自づと御佛の思召にかなふもの故この身に持ち來りし丈は毫も残さずにつかうてゆく物とおもふ。敢て強ちになき命造をもとまらむなど、おもふ人は自分で自分の命を心から氣をもみころしてしまふのおもふ。佛まかせの安き心と成りぬれば自分で自分を殺すようなことはない。今回が輪廻生死のまはりじまひとおもへばまづは大抵のことは忍びて一日なりとも娑婆悲劇も充分に覽見するもまた一しほの興味あることにて候。實に此世界の大活動劇は神が物したる脚本かまたは衆生が作りて見たり見られたりかは知らねどもこれほどの大舞臺にすみからすみまで喜劇も悲劇も悪漢も善人もいかなる處にも演出せざる處なきにいたつたの外になく候。

一七

承れば追々に御快方に向なされ候との事。大ミオヤより大決心をなさしめむとの聖旨より一度しやばの假の身の何時替すべき日の來るにもあはてぬようとの深き思召の然りしことならんと存じ候へば實に御親さまの至れる證せる聖意は只々仰ぎて感謝するの外之なく候。先帝の如く文明的の醫師はあらゆる手を盡すすべての術を施し奉つるもまた五六千萬の臣民等が佛に神に祈り奉るともいかに致しがたきは大ミオヤの御旨に背き奉

ることならぬ。大ミオヤはいか成聖意によりて御引上げ遊ばされしかば人智の測知する處に非ず。維新以來吾國民は天皇陛下の外にての大なるミオヤの大権能を信せず人間の力が宇宙を自由にするかのよう妄計す。其國民の最幼稚なる智慧淺きものをさとしめんが爲に大ミオヤより引上に相成り、人間はすべて天の大ミオヤの大権には信順すべきを示し給ふとおもへば、大ミオヤの慈悲のふかさはたとへばやそ教にて、天の大ミオヤはすべてをあはれみ其愛を表はす爲に一りの子を犠牲にして罪ある衆生を救の道を示し給ふとの如く、大ミオヤは人間の智と力とは決して估みに成るものならざることを我國民にしめし給ふことならめと存候。吾國民は大に覺醒して天の道に信順すべき動機を與へられしも、如何せん宗教家の其理を示し人民を救はんとするもの有なし只心ある者自ら信する外なし。貴姉も此先の命は全く大ミオヤの特寵より與へられしものと信じて光明の中の日ぐらしのほどを祈候。

昭和七年三月十三日 印刷  
昭和七年三月十五日 發行  
能代郵税共 年二圓

編輯兼 山崎 辨成  
發行人  
牛込區早稲田鶴卷町四〇三  
印刷人 小林 七太郎  
牛込區早稲田鶴卷町四〇三  
印刷所 靜文社印刷所

東京市小石川區水道端二丁目四十四番地  
ミオヤのひかり社  
振替口座東京六八五一番